

# 本を選ぶ

NO.459 2023年(令和5年)8月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL:03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>指先の話 再

●図書館を離れて (第59回)



●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## 指先の話 再

植物学者の牧野富太郎博士をモデルにした朝の連続テレビ小説「らんまん」が楽しい。普段はテレビドラマには全く無関心なのだが、つい見てしまう。ドラマは巧みな構成で展開し、見せ場が随所であってイケている。主人公は珍しく男性で、天真爛漫な人物として描く設定に見えて、案外人間臭い筋立てを毎週繰り出してくる脚本家の企みが巧妙に仕立てられている。一方で、劇伴(劇中音楽)を担う阿部海太郎がこれより他にないくらい実に心憎い音を場面ごとに流すのも毎回楽しみだ。素朴でシンプルな音の連なりがドラマの進行をそっと押しながら余韻を生み出している。

本題に戻ろう。擦弦楽器と呼ばれるバイオリンやビオラ、チェロなどの弦楽器は、楽器本体に張りわたした弦を弓で擦って音を出す。弓に張った馬毛で弦を軽く擦るのだ。だが、それだけでは弦を擦っても音を出せず、弓毛に松脂を塗り込まなくてはならない。これでやっと楽器が発音する。松脂を与えた馬の尻尾を張った弓がなければ、楽器の演奏はできないのだ。

弦楽器演奏用の松脂の製造販売は弓の専門メーカーなどが古くから手がけている。バイオリンやビオラ用、チェロやコントラバス用など初心者用

からプロの演奏家向けまで多くの種類がある。松脂は、松の樹皮に溝を切ってしみ出させる。漆やメイプルシロップなどの樹脂あるいは樹液を採取するのと同様である。この松脂を精製・調整してメーカーはさまざまな固さに仕上げる。

弓毛のキューティクルに松脂をくっつけると弦を擦る摩擦が生じて発音するのだが、当然そこに演奏家の好み相俟って、松脂の硬軟が必要となる。弓毛や弦との組み合わせに加えて松脂の性質によっては音質にも影響する。例外的にとびきり高価な松脂もあるが、普通は数千円程度だ。

同じく弓ではあるものの、日本の弓道でも松脂が活用されている。弓道では道具の手入れのために松脂とごま油などを混ぜ合わせて練った薬煉(または天鼠と表記/いづれも、くすねという)を弦の手入れや昔は弓具の接着にも使われていた。かつてはくすねを一旦草鞋に塗った上で弦にその草鞋を当てて摩擦をかけ、毛羽立って乱れた弦の繊維を整えていた。一般的に使う「手ぐすねを引く」という表現はここから転じたと聞く。手筈を整える、という表現も弓道から来ているようだ。『紅葉重ね・離れの時機・弓具の見方と扱い方』(浦上榮著/遊戯社/1996年)

野球などで使われる滑り止めのロジンとは、投手がボールのすべり止めに使う粉状に砕いた松脂だと思っていたが、大半は炭酸マグネシウム配合で残り2割ほどが松脂だそうだ。クラシック・バレエでも舞台側で禁止していなければ、バレエ・シューズの滑り止めに松脂を使用していたらしい。(埜村 太郎)

## 図書館を離れて (第59回)

—七か八か、羊か山羊か？—

並木 せつ子

このシリーズの52回で「いいとよい」という文章を書いていたとき——「いい」と「よい」の使用例を調べるため、やみくもに明治から昭和初期の本にあたっていた——、偶然『おほかみ』という絵入りの本に出会った。これがグリムの「おおかみと七ひきのこやぎ」（以下「おおかみ…」）だった。1889（明治22）年の出版で、＜独逸 グリム氏原著＞、訳者＜愛知県士族 上田萬年<sup>かずとし</sup>＞、発行者＜東京府平民 吉川半七＞とある。これを見ただけでもおもしろそうだ。「いい」も「よい」も関係なく読み始めた。

するとくむかし一疋の年とった女羊<sup>ひつじ</sup>があつて、七疋の子供を可愛がって育てて居た＜小羊<sup>ひつじ</sup>たちはその足が白いゆえ……＞と、ヤギではなくヒツジの話になっている。にもかかわらず、絵は髭のあるヤギなのだ。重訳とあるのでドイツ語の原書ではなく英訳本を訳したのかもしれない。その過程でおきた誤りだろうか。本来の仕事（「いいとよい」）をちょっと横に置いて、昔の「おおかみ…」を少し調べてみることにした。

### 明治期の「おおかみ…」

日本で最初の「おおかみ…」と言われているのが、この『おほかみ』の前々年、1887（明治20）年に出版された『ハッ山羊』で、これも訳者＜広島県士族 呉文聰<sup>くれあやとし</sup>＞、出版人＜東京府平民 長谷川武次郎＞と、いちいち大げさな時代である。こちらはくむかし八ッ子<sup>やぎ</sup>をもちし牝山羊ありけりと、文も絵もちゃんとヤギなのだが、なぜかコヤギが8匹。絵も母ヤギのほかにコヤギが8匹描かれている。初期の2冊の「おおかみ…」が“七ひき”でも“やぎ”でもなかったということ、私はこのとき始めて知った。またこの2冊が明治初期のグリム関係の研究書には——瀬田貞二の『落穂ひろい』にも——必ずとりあげられるような、有名な本だということも後に知った。私には瞠目であっても、既によく知られた事実で、驚くほどのこと

ではなかったようだ。

この2冊の後も、「おおかみ…」は続く。1889年「狼と七匹の羊」（『小国民』）、「狼と幼山羊」（『動物のはなし』）、1891年「狼と羊」（『幼年雑誌』）、1895年「子猫の仇<sup>あだ</sup>」（『少年世界』）、1898年「おおかみとこいぬのはなし」（『修身童話』）、1901年「狼と七匹の犢牛」（『家庭講話 ドイツお伽噺』）、1902年「狼と小羊」（『金港堂お伽噺』）、「狼と七つ小羊の話」（『少女界』）、1904年「羊の天下（脚本）」（『少年世界』）、「狼と小羊」（『福音新報』）、「伶俐な山羊」（『教授材料 話の泉』）、1908年「狼と七匹の子山羊」（『教育お伽噺』）、1909年「狼の計略（筆者註：羊の話）」（『グリムお伽噺（通俗文庫）』）、1910年「狼と七疋の山羊仔<sup>やぎのこ</sup>」（『新訳解説 グリムお伽噺』）。ヒツジばかりかネコ、イヌ、ウシまでいて、半数以上はヤギではない、というのが明治期の「おおかみ…」だった。

### 大正期にはヤギの話として

大正時代に入ると1914年に『狼と山羊の子』（表紙タイトルは『狼と山羊』）のほか、独語対訳本が3冊「狼と七匹の小山羊」（『独和对訳グリム十五童話』）、「狼と七匹の小山羊」（『グリムお伽噺講義』）、「狼と幼い山羊の子」（『グリム童話』）などのタイトルで出版され、その後も1915年「狼と七匹の山羊仔」（『通俗グリム童話物語』）、1916年「狼と七匹の小山羊」（『グリム御伽噺』）、1921年「七頭<sup>しちびき</sup>の小山羊と狼」（『グリム童話集』）、1924年「オオカミト七ヒキノコヤギ」（『カナグリムオトギバナシ』）、1925年「七匹ノコヤギ」（『こどもグリム』）、「おほかみと七匹の子山羊」（『小学童話読本』）、1926（大正15）年「おっかさんのやぎと七ひきのこやぎ」（『ひらがなぐりむ』）と続く。タイトルはさまざまだが、大正期にはヤギの話として定着した。

これらはほとんどが、雑誌か童話集に収められた中の1編だが、それにしても明治から大正にか

けて「おおかみ…」のなんと多いことか。『グリムへの扉』によれば明治期にもっとも多く訳出された〔グリムの〕話は「オオカミと7匹の子ヤギ」>だという。

昭和期になって数は減るが、「おおかみ(狼)」と「七ひき(匹)」の「こ(子・仔・小)やぎ」というタイトルはほぼ定着し、戦後へと引き継がれていった。金田鬼一訳の岩波文庫『完訳グリム童話集』(1953年)にも「狼と七ひきの子やぎ」として収められている。(ここまで参考:『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター/2000年刊)

### 多種多様な「おおかみ…」

このときは、ここで本来のお仕事(「いいとよい」)に戻ったため、内容に深入りすることなく、そのまま放棄していたが、最近ヤギを見る機会があって思い出した。“ヤギありヒツジあり8匹あり”、そして“天下やら<sup>たくらみ</sup>伶俐やら計略”やら、タイトルを追うだけでも興味深かった「おおかみ…」にもう少し立ち入ってみたい——とりわけ明治時代に、と思うようになった。まず、最初の『八つ山羊』『おほかみ』は国会図書館のデジタルコレクションで既に見ていたが、他の本も中身を見たい。これはインターネット公開されたデジタルコレクションや、国会図書館、大坂国際児童文学館、神奈川近代文学館の遠隔複写で、数点を除きほぼ入手達成。タイトルもおもしろかったが、中身もおもしろい。

しかし問題はそこからだった。グリム童話の明治時代の翻訳について書かれた資料にあたってみようと思ったら、あるわあるわ到底目を通せる量ではない。学生時代の卒業論文を思い出してしまった。教師(助手?)から「テーマを決めたら必ず過去の研究史に目を通すこと」という厳命と、「それゆえ有名な人や作品を選ぶと研究史に目を通すだけでも時間がかかるので心せよ」という助言があったのだ。グリムはまさしくそれだった。既にあらゆる方面から研究・考察されている。という



小林永濯による二つの挿絵 上・『八つ山羊』 下・『おほかみ』  
母ヤギが出かけて行くところ

(どちらも「国立国会図書館デジタルコレクション」より)  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1168879/1/2>  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1169961/1/3>

わけで周知のことばかりかもしれないが、研究でも考察でもない、私がおもしろいと思った「おおかみ…」についてふれてゆきたい。

### ヤギと羊と

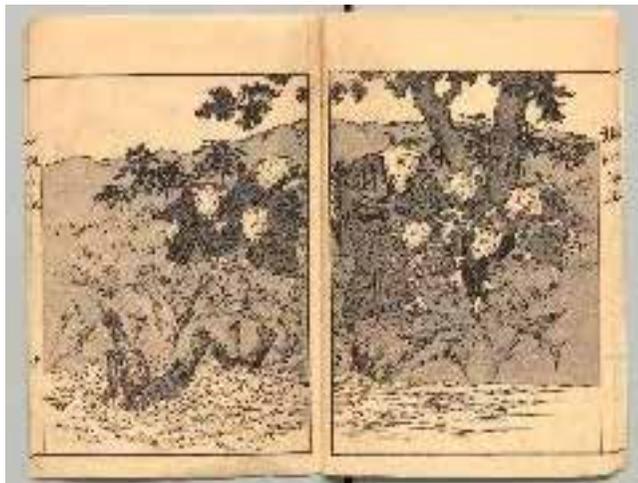
最初の「おおかみ…」と言われる『八つ山羊』は抄訳である。明治から大正の他の多くの作品同様、歴史的仮名遣いで変体仮名、しかも文語体なのでくるすちうのことをたづぬるに しかじかと ことたふれば さらばわがこの敵を討ち果たすべし、いまだとほくはゆくまじ>とく狼の、あとを追ひかけてぞ、いそぎけり>という具合。子どもたちが食われたことを聞いたときの母ヤギの反応だが、江戸時代の本を読んでいるような気分になる。そ

れなのに、絵は洋風で母ヤギも洋装だ。そして家の扉が開いたり、オオカミの腹が開いたりする仕掛け本になっている。この絵を描いたのは——画家名の表示は無いが、小林永濯（狩野派の画家）とされている。1884年ドイツで出版された『ドイツ子どもの童話集』のロイテマンが描いた挿絵と、構図をはじめ母ヤギの着衣など酷似しており（『挿絵でよみとくグリム童話』）、今なら問題視されるところだが、全体的な印象はロイテマンよりやさしい色合いで、永濯独自の世界を生み出している。訳者の呉文聰は統計学者。底本について詳しい研究がなされているものの、“コヤギが8匹”の理由はわからない。研究者にとって8匹自体はさしたる問題ではないみたいだ。

その2年後に出版された——私が最初に驚いた『おほかみ』も、絵を描いたのは『ハツ山羊』と同じく小林永濯らしい。こちらはヤギ（文章は羊だが）もオオカミも着物に帯という和装で、家も障子のある和風の住まい、同じ画家でも全く雰囲気異なる。出かけてゆく母羊と、見送る子羊たちの場面（絵はヤギだが）は美しい佇まいだ。訳者の上田萬年は国語学者で、当時ばらばらだった日本語や、表記の統一などに尽力した人だ。『日本語を作った男』（山口謠司著／集英社／2016年）のモデルにもなっている。こちらも歴史的仮名遣いや変体仮名ではあるが、<多くの子供たちを失って、羊のおっかさんはかなしみのあまり、家にも居たたまれんで、外へ出てひとり残った子供とともに、かのかの青い草庭の邊まで来た…>と言文一致の文章で、『ハツ山羊』で引用したのと同じ場面だが大分読みやすい。また原書にほぼ忠実な訳だと評価もされている。それなのになぜヒツジなのだろう。そして『おほかみ』の“羊”に引きずられるかのように、明治末までヒツジは続いた。

#### ヤギが羊になったのは

これについて虎頭恵美子はく山羊が羊になったのは、グリムの原書から他の言語に訳されたとき



小林永濯による二つの挿絵 上・『ハツ山羊』 下・『おほかみ』  
オオカミが川に落ちたところ この場面は構図が似ている  
(どちらも「国立国会図書館デジタルコレクション」より)  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1168879/1/8>  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1169961/1/14>

に変更されたのか、それとも上田が訳出する際に変更したのか、その辺りのことは不明である>（『日本におけるグリム童話翻訳書誌』）。野口芳子はく日本では当時、ヤギの方が多く、ヒツジのほうが珍しい存在だったのだが、羊毛を取るためヒツジの飼育が政府によって奨励されていた。それが変更の理由か定かではないが、挿絵に描かれている動物はヒツジでなく、ヤギであるところが、矛盾していて、興味深い>（「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」）、また<当時の日本人には山羊のほうが羊より馴染み深かったはずだ>からく読者にわかりやすいようにという配慮からではなく、単純な語句の間違い>（『グリムのメルヒェン』）だと断言する。

一方で、奈倉洋子は「両方とも日本人には珍しい存在だったので、取りちがえられることもあったようだ」としながら、「おそらく、山羊よりは羊のほうが、当時の日本人には身近だったのだろう」と逆の見解を示す（『日本の近代化とグリム童話』）。西口拓子は上田訳が「やぎ（山羊）」が羊と翻訳されているのは「振り仮名に「ひつじ」とあるため、誤植ではないとみられる」とし、「日本では古くから「容姿・生息地」に関して混同が認められ…」という註を付している（『挿絵でよみとくグリム童話』）。

### ヤギ・ヒツジ事情とグリムの「ヒツジ」問題

『日本動物史』の「ヒツジ」の項には、「我が国の史料で単に羊としているものには、羊と山羊とが混同されており……山羊は中世以降は野牛と記されるようになるが、羊との区別は必ずしも厳格ではなく、『訓蒙図彙』『和漢三才図絵』に描かれた羊の図にはいずれも髭があり、山羊と思われる」とある。

また「奈良時代のヒツジの造形と日本市場の羊」（廣岡孝信『考古学論叢 第41冊』）によれば「遅くとも10世紀以降にはヒツジの姿が現実の姿ではなくなって……近世までヤギをヒツジであると認識し続けていた」と「未」「羊」は仏教文化や文字表現の中の珍獣・靈獣として、存在意義を長らく

保ち続けた」という。

どちらも、近代以前の庶民にとって身近な家畜でなかったのは確かなようである。古い文献にも名まえは登場するが、家畜として普及することはなかったため、干支の末年で名まえは知っていても、本物のヒツジの姿を見る機会は無かったろう。ヤギの方も、目にすることができたのは、南西諸島や九州の一部の人びとだけだったようだ。産業用——羊毛用のヒツジ、乳用のヤギ、として輸入されるようになったのは明治期以降になる。

日本のヤギ・ヒツジ事情は概ねわかったが、結局グリムの「ヒツジ」問題は解決していない。『おほかみ』は英訳本の重訳で、底本は英訳本のウェナート版だということまで突き止められているというのに。私の興味の赴くところは、どうも些末に過ぎるようだ。

蛇足ながら、『サザエさん』（『長谷川町子全集 2』）にも、近所の家からビンに入ったヤギ乳が届けられる場面がある。「きのうのヤギのおチチとてもうすかったわ」とサザエさんが言っているので、毎日届けられていたのだろう。民家の軒先に髭のあるヤギが1頭いる絵も描かれている。昭和23～24年ころに掲載された作品で、東京でも乳用に山羊を飼う家があったと思われる。

（なみき せつこ）

### DMがたろく

翻訳者による海外文学ブックガイド2

# BOOKMARK

金原 瑞人 編  
三辺 律子



読めば読むほど、  
もっと読みたくなる。  
いまこそ  
手に取りたい  
169冊！

2023  
8/1  
発行

定価1760円（本体1600円） ISBN978-4-484-22241-7

CCCメディアハウス 〒141-8205 東京都品川区上大崎3-1-1  
☎049-293-9553（販売） <http://books.cccmh.jp>



国際 NGO が発行する  
児童向け人権フリーペーパー  
身近な問題の話や漫画で  
人権をわかりやすく伝え、  
学びにつなげる

対象：小学校高学年～

年2回発行しています。  
何冊でも無料でお届けします！  
ぜひ、お役立てください。

公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本  
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-12-14 7F  
Tel: 03-3518-6777 Email: [info@amneste.or.jp](mailto:info@amneste.or.jp)

D. M. ロベス、B. ナナイ、N. リグル／  
森 功次 訳

## なぜ美を 気にかけるのか

感性的生活からの哲学入門 生活の彩りの意味を問う。 2750円



鈴木貴之 編著

## 人工知能と どうつきあうか

哲学から考える 人間と人工知能が建設的な関係性を構築する道を探る。3520円



TEL 03-3814-6861 \*価格税込  
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 <https://www.keisoshobo.co.jp>

シリーズ 時代の岐路を新しい切り口でとらえる

## 歴史の転換期

監修 木村雄二・岸本英輔・小松久男

定価・各3,850円(税込)

第11回記本 第5巻

## 1348年 気候不順と 生存危機

千葉敏之 編



シリーズ  
全11巻  
ここに完結!



「いま」だからこそ共感できる  
歴史の転換点  
複合する災害のなか  
人々はどうか生きてきたか

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-13-13  
山川出版社 TEL 03-3293-8131 FAX 03-3292-6469 <https://www.yamakawa.co.jp/>

## 世の中を知る、 考える、 変えていく

高校生からの社会科学講義

「環境」「貧困」「テクノロジー」「ジェンダー」を軸に、経済学・政治学・法学・社会学のそれぞれの特色、着眼点、アプローチの仕方、問題意識を伝える。

飯田 高・  
近藤絢子・  
砂原庸介・  
丸山里美 編  
四六判  
定価2420円



松林哲也 著  
四六判 定価2310円  
期日前投票期間や投票所の数、選挙啓発活動や議員定数の不均衡などの投票環境条件に注目し、それらがどのように投票率に影響を与えているのかを実証的に論じます。

何が投票率を  
高めるのか



有斐閣

東京都千代田区神田神保町2-17  
<http://www.yuhikaku.co.jp/> 価格は税込

## 100歳 で夢を叶える

谷川俊太郎  
道場六三郎  
樋口恵子  
野見山暁治  
大村崑  
大川繁子  
大島純子  
室井摩耶子  
玉川祐子  
三浦雄一郎  
杉浦範茂  
暉峻淑子  
渡辺貞夫  
青木悦子

木村美幸 著 1760円

生涯現役を貫く14名の鉄人たちが、この先の夢を語る!

晶文社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-11  
Tel 03-3518-4940 <https://www.shobunsha.co.jp/>

## ESTRELA

■2023年8月号  
No.353/8月10日発行  
B5判 64ページ  
定価1,205円(税込)

### [特集] 集落統計を考える

- 人口減少社会における集落統計のあり方とは  
林 玲子(国立社会保障・人口問題研究所 副所長)
- ユーザーの観点からみた小地域統計の課題と展望  
小池 司朗(国立社会保障・人口問題研究所 人口構造研究部部長)
- 地域の階層性と住民自治組織の関係  
作野 広和(島根大学教育学部 教授)
- 集落定義の多様性と地域のソーシャルキャピタルを考える  
菅浦川 由郷(新潟大学大学院医歯学総合研究科 十日町いきいきエイジング講座 特任教授)
- 集落統計としての国勢調査の利用可能性:  
新潟県F地区における調査区と集落の関係に着目して  
佐藤 周平(東京農工大学大学院連合農学研究所 博士課程)
- 農業集落調査の社会的意義と今後の展望—日本村落史の観点から—  
戸石 七生(東京大学大学院農学生命科学研究科 准教授)

公益財団法人 統計情報研究開発センター(Sinfonica)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階  
TEL: 03-3234-7471 <https://www.sinfonica.or.jp/>

## 現場で役立つ! 教育データ 活用術

大江耕太郎・  
大根田頼尚 [著]

中室牧子教授 推薦!

データの収集・  
分析・活用まで

近年、教育分野でも活用が期待されるビッグデータ。しかし、実際にどう使いこなせばよいのか? 具体的なノウハウを基礎から解説!  
●9月下旬刊/A5判  
定価2970円(税込) ISBN 978-4-535-55959-2

## 数学者の選ぶ 「とっておきの数学」

数学セミナー編集部 [編] ●9月上旬刊/A5判

数学の世界に触れていると語りたくなるほどの「推し」に出会えるだろう。本書の多種多様な「好き」から数学の魅力を見つけよう。 定価2200円(税込) ISBN 978-4-535-79002-5



日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4  
☎03-3987-8621 <https://www.nipponyoko.jp>